

ラカン理論における欲望とシニフィアン

—欲望のグラフについて^①—

番 場 寛

序	73
シニフィアン.....	74
「欲望のグラフ」における時間性	79
「ケ・ヴォイ <i>Che vuoi?</i> (汝は何を欲するのか?)」	81
〈他者〉の〈他者〉について	84
ヒステリー患者の欲望—症例ドラ—.....	87
「美しい肉屋の妻の夢」	89
欲 動.....	91
「美しい肉屋の妻の夢」再考	93
ラカン理論における「の (de)」の機能	95
ヒステリー患者と強迫神経症患者のグラフ.....	97
強迫神経症患者の欲望.....	99
結 論	104

序

「欲望」とは何であろうか？ われわれは普通、何かを主語にしてそれに続く述語という形でその問題とした対象を明らかにし、定義を試みようというやり方をとる。ラカンの理論における多くの概念に関してと同様に、「欲望」に関する定義らしきものは、のちに紹介する一つを除いてない。欲望に対してラカンの述べたものでもっとも有名なものは、「人の欲望は〈他者〉l'Autreの欲望である（以後、本稿においては表記上、「大文字の他者」とも訳されているこのl'Autreを〈他者〉と記すことにする^②）」といったものである。日常の経験からは最も個人的なものであると思われる「欲望」が大文字で書かれているとはいえ、「他者の欲望」であるとはどういうことなのであろうか。この定義らしいものの説明はラカンの言説には示されていない。この問題に関しては別の論文で解釈を試みた^③。

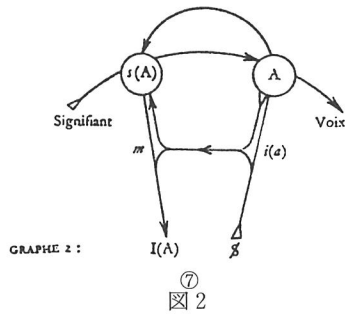
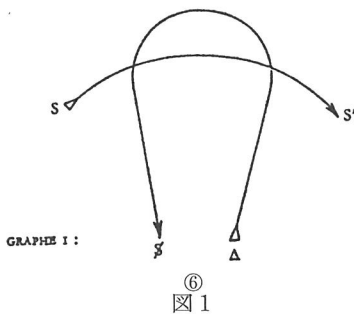
数学者の故山口昌也氏が、ある研究会で^④たとえば二次方程式ではそれを操作して未知数の x を左辺においた $x=f(x)$ （注： $f(x)$ は x が含まれる式を示す）という式が成り立つが、それは定義する内容に定義されるものが入っている（ x を定義する式に x が使われている）が、これが数学では許されると言われたことがある。ラカンの言説にみられるこの普通の意味での定義のなさはこの逸話を思い出させる。もしこれが数式であれば変数の数だけの式を集めて連立方程式のように解いていけばいいのであり、実際にわれわれがとりうるのも、ラカンの言葉からその定義されていない概念を含む言説を集めてきてそれを数式の連立方程式のように並べて解読する方法しかないのではないであろうか。

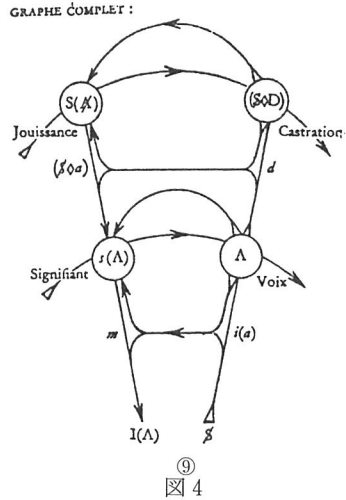
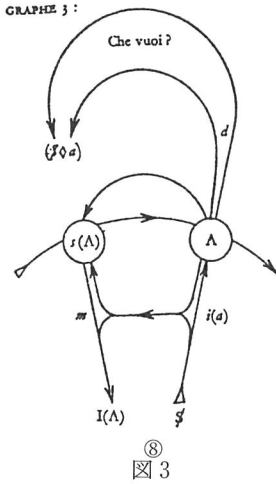
シニフィアン

フロイトを「欲望をシニフィアンと結び付けた唯一の人」^⑤とみなすラカンは、自らもシニフィアンとの関係において欲望を考察し理論を展開させている。ラカン理論でもっともわれわれの興味を引くのは、身体に最も結びついた感覚的、感情的な精神の動きの一つである「欲望」をシニフィアンで分節できるであろうかという問題である。さらに、その「欲望」はさきほど紹介した「〈他者〉の欲望」をどのように説明するのかという問題とも重なってくる。

そうした疑問になかば答えるかのように、またそうした疑問をより深めるかのように「欲望のグラフ」と呼ばれる一連の図がラカンによって提示された。「欲望のグラフ」は『エクリ』に収められた「フロイト的無意識における主体の転覆と欲望の弁証法」（以後「欲望の弁証法」と略す）という論文の中で次に示すように4つ提示されている。

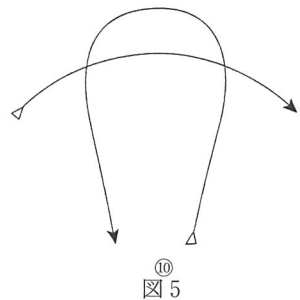
1966年発行の『エクリ』に収められているこれらのグラフはラカン自身によって殆ど説明されていない。例えば、縦方向の曲線の出発点が、図1のグラフでは△となっているのに他のグラフでは主体を表すSとなっている。こ





れは主体を既に象徴界に入ってシニフィアンによって徴づけられたものと捉えたときに他のグラフのようになるのだと思われる。またシニフィアンとして発した横向きの曲線が〈他者〉A を通過後「声 Voix」となるのは意味の分節を済ませた後のシニフィアンは物質的な声でしかないということを示していると考えられる。しかし理解に苦しむ部分がこれらのグラフには数多くある。それぞれのグラフの正確な狙いを明らかにするには「欲望のグラフ」が発生した時点にまで遡って考えなければならない。

「欲望のグラフ」が最初にラカンのセミナーで提示されたのは1957年から翌58年にかけて行われた「無意識の形成物」というセミナーにおいてである。そこで最初に提示されたものが図5に示したものである。



てこのグラフを使って明確にされているのは、「欲求」と「欲望」の違いであり、しかもそれが詳しい説明なしとはいえ、ここで既に「要求 demande」という概念を用いて説明されていることに注目したい。

まず、「欲求として始まったものは要求 la demande と呼ばれるであろう^⑬」と言われる「要求」は「欲望の表現におけるシニフィアンの最初の行使^⑭」の基礎に置かれるものと説明される。ラカンはどのようなシニフィアンの行使も「欲求」の現われを「変形」し、その結果、どんな小さな変形でもそれにより意味されるのは、「生の欲求 le besoin brut」の「彼方の何か」であり、シニフィアンを使用することにより、改編されるのだという。そのシニフィアンが「欲求」と交叉した時に生まれるシニフィエといったもの（つまり、その時意味されるもの）は「欲求」の純粋で単純な翻訳ではなく、「欲求」を再び組み直すことであり、それが「欲求」とは別の「欲望」の創造なのだ^⑮とラカンは説明する。

つまり、シニフィアンと交わることで「欲求」は変形され、「欲望」が生み出されるということで、ラカン自身が乱暴に言っているように、図式的には「欲求プラスシニフィアン」が「欲望」であるとも言えるのである^⑯。そしてこの日のセミナーではメッセージを呼び起こす〈他者〉は「母親」だと説明されている。

欲望とは何でしょうか？ 欲望は欲求、— それがここにもたらすことができる混沌全てを伴って、要求が他の秩序、象徴的秩序の中に導きいれる要求なのですが、この欲求の想像的方向の秩序に純粋かつ単純に属しているもの全てに対する本質的な隔たりによって定義されます^⑰。

ところが、翌1月8日のセミナーでは、グラフにおいてシニフィアンの線と交叉するのは、「欲望の線」だと説明されている。つまり12月4日のセミ

ネールでは、シニフィアンにより変形を受けるのは「欲求」であり、それが「欲望」となるとされたのに、ここでは「欲望」がシニフィアンを通過することにより、「屈折 *réfraction*」を受けるとされている。もう一つの大きな違いは「〈他者〉」が「コードの所在 *siège du code*」であると同時に以後何回となく繰り返されることになる「シニフィアンの宝庫 *trésor du signifiant*」と定義しなおされていることである。そしてラカンにしては珍しいことに思われるが、擬人法的に「あなたの欲望がシニフィアンによって寝取られる」^⑱などという表現を用いている。

では、「欲望のグラフ」における縦方向の曲線のラカン自身による説明の変化をどのように解釈したらよいのであろうか。この二箇所の食い違いがラカンの不注意によるものではないとすると、次のように考えられる。シニフィアンにより変形を受けた「欲求」が、「欲望」となり、それがさらにシニフィアンにより「屈折」され、最初のものとは異なったものとなる、と解釈せざるを得ない。1958年2月5日のセミナーではこの縦向きの曲線を「欲求あるいは欲望 *besoin ou désir*」と明言している。ここでは自ら「もっとも単純な形で再び取り上げる」と明言している通り、最初の図1と同じものを用いているが、縦方向の曲線の説明が異なっている。

ここで欲求と呼ぶことのできるものが見つかりますが、私は欲望と呼びましょう。なぜなら原初の状態もなければ、純粋な欲望の状態もないからです。元来、欲求は欲望の次元、いわばシニフィアンとある関係を持たなければならぬ人間において運命づけられた何かの次元で動機づけられます。^⑲

この見方から推察するに「欲望のグラフ」の上の段の部分の縦方向の曲線が「欲望」を表し、最初の部分は「欲求」を表していると考えることが可能である。

「欲望のグラフ」における時間性

「欲望のグラフ」を検討するとき、それぞれの線が何を指しているのかという点とともに考えなければならないのは、表されたそれぞれの線において「時間」がどのように流れているのかという点である。

ラカンは『セミナー第5巻』の中で、「それらは必ずしも年代順の *chronologique* 時間ではありませんが、かまいません。というのは論理的な時間^⑲もまたある連続においてしか進行することができないからです」と「年代順の」時間と「論理的な」時間とを区別した上で、「継起 *succession*」という点での共通点を挙げている。

さてここでさきほどの「クッションの綴じ目 *point de capiton*」についてもう一度考えてみよう。

ラカンは「欲望の弁証法」という論文のなかで、このグラフの「大文字の A はコードのことを意味しているのではない」と明言しており、「シニフィアンの宝庫の場」だと定義している。*s(A)* については「意味作用 *signification* が終わったものとして構成される句読点」と呼んでいる。そしてさらに重要なことは、この「大文字の A」は「空間 *espace*」というよりは「場所 *lieu*」を表し、*s(A)* は「持続 *durée*」というよりは「区切り *scansion*」としての「瞬間 *moment*」を表していると言い換えている点である^⑳。つまりここでは片方を空間的に捉え、他方を時間的に捉えるようなアクロバットの的な見方が要求されているのだ。

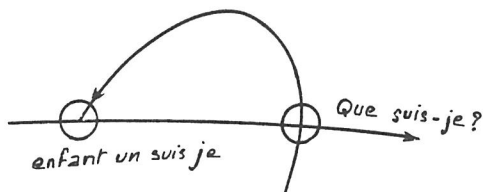
さてこの二つの交差点のことを更に考えてみよう。1957年11月13日のセミナーではこの、のちに大文字の A と呼ばれる点からのちに *s(A)* と呼ばれる点まで矢印が向かうことを、ある文が始まり終わったときに初めてその文の意味が理解できるということを「シニフィアンの事後的な *nachträglich*」

行為と呼んでいる。この *nachträglich* は *après coup* と訳されている。

このことをより明確に示している個所が『セミネール第8巻』に収められている1961年4月19日のセミネールにある。図8に示したこのグラフは *Seuil* 版には落ちており e. l. p 版に収められている。ただしこれについての *Seuil* 版の説明部分については e. l. p 版でも意義は申し立てられていない。

これを見た者がまず不思議に思うのは、「私は何者なのか *Que suis-je?*」という問いに対する答えの「私は子供である *je suis un enfant*」という文が逆向きに書かれている点である。ラカンは片方だけなぜこの向きで書いたのであろうか。シニフィアンの連鎖を表す線の矢印の方向に時間が流れているとしたなら、一番時間的に新しいのは *enfant* という部分ではないか、と思ってしまうがちだ。しかしこのグラフはそう読んではいけないのである。

ラカンはこのグラフの説明にあたる個所で「同時性 *simultanéité* はいささかも共時態 *synchronie* ではない」ということを強調した後で、「同様に、この交叉は同時に二度行われるでしょう。もし、確かに事後的に *nachträglich* ということが何かを意味しているとするなら、それは意味が明らかになるのは、文が終わった瞬間だということの意味しているのです」と説明している。この部分の一見矛盾した表現、「同時に二度」という部分にラカンの苦心が窺える。ここにおいてはラカンは、「意味 *signification*」を生もうとする主体の



②
図8

「意図 intention」を「欲求 besoin」と同じものとみなしている。それがシニフィアンの連鎖と出会い、意味が生じるのは「事後的」である。しかしそれは「同時でもある」のだ。グラフのように図として示されたものは全てを二次元の空間的に表すことで成り立っている。こんな風に考えるべきなのであろうか。

Que suis-je? と enfant un suis je は日常的なフランス語の読み方の規則に従って左から右へと読まれるべきなのだ。そうすることでシニフィアンの連鎖と交差した主体の「欲求」なり「意図」は enfant という単語から始まり je まで戻ることにより始めて je suis un enfant と「共時的に」意味が成立するのである。

「ケ・ヴォイ *Che vuoi?* (汝は何を欲するのか?)」

『エクリ』に収められている4つのグラフの内3つのグラフと同じかそれをわずかに変形したものは全て、「無意識の形成物」と題されたセミナーで取り上げられているのに、*Che vuoi?* と矢印をつけられた図3のグラフの原形は翌年の「欲望とその解釈」と題されたセミナーの1958年11月12日に初めて提示されている。このグラフでは「〈他者〉の欲望」というものが強調されている。このグラフ全体の形がクエションマークをしていることと *Che vuoi?* という言葉は密接に結びついている。ラカンによればこの *Che vuoi?* とは J. カゾットの小説『恋する悪魔』の中の悪魔が現れるときに発するイタリア語で *Que veux-tu?* とラカンは訳している。これは〈他者〉に対し提示された〈他者〉が何を欲しているのかという問いであり、同時にその「他者から逆向きに主体が受け取る問」であるとされている。そしてそれは主体が「〈他者〉の欲望」としての欲望に出会う問いかけだと説明されている。

『セミナー第8巻』ではラカンはこの *Che vuoi ?* を *Que veux-tu ?* (汝は何を欲するのか?) と翻訳したあとさらに「本当に汝の意志である欲望はあるのか?」²⁴ と言い換えている。さらに、この矢印そのものがまるで大きなクエスチョンマークをしていることがこの問いかけを強調しているのである。

重要なことは、前の年のセミナーで出された出席者からの質問に答える形でラカンはグラフの説明を展開していることである。まず、このグラフの目的を、「語る主体とシニフィアンとの関係」を明らかにするためのたと明言²⁵ している。

ラカンがこの図9のグラフを提示しながら明らかにしようとしていることは、前年の出席者から出た質問で、グラフが二段階になった理由である。

これを見てまず気づくことは、『セミナー第6巻』で *Che vuoi ?* が出てくるグラフは二段になっているということと、後に $S(A)$ となる左上が $S(A)$ となっていることである。ラカンはこのグラフに決定的と思われる説明を付け加えている。それはここに示された4つの点、 Δ は「主体の意図 l'intention」

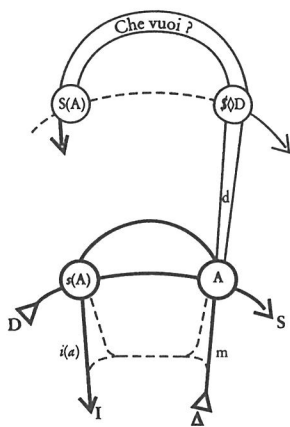


図9. 1958年11月19日²⁶

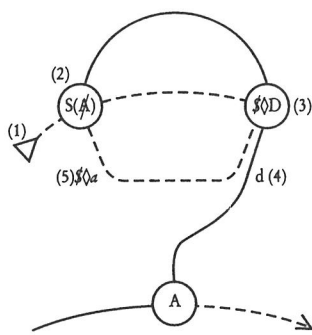


図10. 1959年3月18日²⁷

を示し、右のコードの場にある A は「語る Je としての主体」を示し、左の D は「要求の行為」を示し、X、これは後に $S(A)$ と変る $S(A)$ のことを示すと思われるが、このグラフの「過程 les procès」はこれらの4つの点から同時に出発するということ、従って「過程は $D-\Delta-I-s(A)$ という四つの行程において同時である simultanés ということ

をラカンは強調している。²⁸⁾
 A は「〈他者〉 l'Autre」を表していた筈なのにどうしてここでは「語る Je としての主体 le sujet en tant que Je parlant」と説明されているのであろうか。これは主体がパロールの主体として成立するのは、「シニフィアンの宝庫」としての〈他者〉においてなのであるということを示していると思われる。

ところがこの説明が行われた日からちょうど4ヵ月ほど後の3月18日のセミナーでは、図10のように無意識の回路(ここでは点線で表されているが)の進み具合を番号をつけて説明している。さきほどのグラフの説明の全てが同時に進行するという説明と矛盾は起きないのだろうか。また $S \diamond D$ は「自己の要求と直面した主体」と説明されているが、それからなぜ戻る形で欲望が形成されているのであろうか。こんな風に考えられないだろうか。図8のグラフの説明で述べられていたが「同時に二度交わる」という表現をもう一度考えてみよう。全ては同時に起る。しかし論理的な展開としては、ある順序のもとに展開していると考えべきなのだ。 $S \diamond D$ という形式で自己の「要求」に直面した主体はそこから再び「欲求」に戻る形で「欲望」に出会う。それは「何かを求めてシニフィアンで表してもそれは常に自分の求めているものとずれているという形で「欲望」が発生する。その「欲望」のあり方は、欲望の対象と直面した主体、 $S \diamond a$ という「幻想 fantasme」というあり方と等しいのである。そのあり方は、グラフの下の部分で、鏡像段階における主体が鏡に映った「他者のイメージ $i(a)$ 」をとおして「自己 m 」を把握する関係とシニフィアンの線を挟んで平行に位置しているのである。

〈他者〉の〈他者〉について

欲望に関するラカン理論を辿っていくと、交叉する二つの曲線のうちの縦方向の曲線がどういう視点のもとに何を表すよう指定されているのかという問題とともに、「〈他者〉l'Autre」がどのように捉えられているのかということが問題となっていることに気づく。この概念だけはラカンにおいては珍しく「パロールの場 le lieu de la parole」²⁹「シニフィアンの場 le lieu du signifiant」³⁰「シニフィアンの宝庫 le trésor du signifiant」のように明確に定義されている。

「欲望とその解釈」と題されたセミナーの6巻ではグラフの上のS(A)を次のように説明している。

S(A)はこのことを意味しています。それはもしA、大文字のAが一人の人間ではなく、パロールの場であるなら、S(A)は展開された形式のもとで、あるいは覆い隠された形式のもとで、シニフィアンの体系、つまりあるランガージュの体系全体が存する、パロールの場に何かが欠けていることを意味します。あるシニフィアンでしかありえない何かがそこに欠けているのです。〈他者〉の水準で欠けており、このS(A)に最も根源的なその価値を与えるシニフィアンとは、それはこう言ってよければ、精神分析の重要な秘密であるこれなのです。

(…) その重要な秘密とは〈他者〉の〈他者〉l'Autre de l'Autre はないということなのです。³²

このように〈他者〉の〈他者〉をはっきりと否定している。ラカンはこの部分にさらに説明を続けている。それは「われ思うゆえにわれあり Je pense donc je suis」に関する説明でだが、「私 je が存在していると考えているときは、その je は〈他者〉l'Autre の場で考えているのであり、その je は je が

存在していると考えているものとは別の者である³³」と説明しており、さらに「〈他者〉の〈他者〉はないということは、〈他者〉には私 je が何であるかについて答えることができるいかなるシニフィアンもないということです³⁴」と説明している。

『エクリ』に収められているさきほど紹介した論文でもこの考えは変わっていない。ところが『セミナー第5巻』に収められている前の年の6月25日に行われたセミナーでは、この〈他者〉の〈他者〉があると説明されているのである。

ラカンはまずグラフの上の線は言語 langage として構造化されているシニフィアンの線であると断言している。そして次に、〈他者〉 l'Autre を「パロールの場 lieu de parole」と定義した上で、その〈他者〉は主体が語るたびに生まれると言う。あくまで「欲動 pulsion」までも「言語 le langage」の射程に入れているラカンの理論とは重ならないが、ソシール言語学の用語で言えば、あたかも「記号体系」としてのラング la langue に支えられてパロールが成り立っているように、ラカン理論においても「シニフィアンの宝庫」、言い換えればあらゆる可能な記号の組み合わせの集合としての「場」からある特定のシニフィアンの組み合わせを選択し、実現することでパロールが成立すると考えられている点ではソシール言語学と重ならない訳ではない。ただ、この箇所においてはラカンは「語る主体」が生まれるたびに〈他者〉が現れると言っているのである。これは他の箇所でもラカンが何度も繰り返し言っている「あるシニフィアンは他のシニフィアンに対し主体を表す Un signifiant représente le sujet pour un autre signifiant³⁵」という言葉に顕著のように「主体」をシニフィアンの「結果」もしくは「効果 un effet」として現れるものと捉えるラカンの考え方に従えば、パロールが成立すると同時に〈他者〉が生まれるという表現は理解できる。

ラカンはここに示したグラフの説明でさらに、「しかし私たちの図式の上の線で分節されるこの彼岸 au-dela は〈他者〉の〈他者〉なのです。〈他者〉の領域で分節されるパロールが問題なのです。〈他者〉の〈他者〉は〈他者〉のパロールがそのように描かれる場なのです」と断言している⁵⁷。ラカンによれば、そうした「パロールの場」としての〈他者〉が同時に私たちに対して「主体」となる場合が考えられ、そうした場合、今度はその〈他者〉が語る場というものが考えられ、それが〈他者〉の〈他者〉だと言う。しかしこの説明に対しては疑問が残る。まず「主体1」というものを考えよう、するとその「主体1」に対する〈他者〉が考えられるが、それが「主体2」になった時にはそれに対する〈他者〉は、果たしてラカンの言う〈他者〉の〈他者〉なのだろうか。それもやはり単なる〈他者〉ではないだろうかという疑問は残ってしまう。ラカンは〈他者〉を「純粋なシニフィアンの場」と「私たちが自分の要求の満足のためにその意のままになっている生身の人間としての〈他者〉」との二つの側面に分けられると考え、その間に「欲望」が位置していると説明している⁵⁸。

わずか10ヵ月後に起きることになるこの理論上の転換をどのように解釈すべきなのだろうか。ラカンの理論上の矛盾というより、絶えず言い換え続けていかなければならない思考の揺らぎであり、そこにこそ注目したい。全ては丁度、グラフの縦方向の曲線がその呼び名を変えていったように、〈他者〉の持つ二つの側面から来ていると思われる。主体の「欲求」がシニフィアンと出会いそれが組み立てられるとき、どうしてもそれが組み立てられる「場」が必要であり、それは言い換えれば「要求 demande」として向けられる相手が必要なのであり、それは誰であれ、パロールを受け止める人間でなければならぬ。その〈他者〉の一つの側面、つまり「シニフィアンの宝庫」としての〈他者〉に固執し強調したのが、「〈他者〉の〈他者〉はない」というテ

ーゼなのではないだろうか。

現に後の1961年のセミナー「同一化 L'identification」の最初のセミナーでは次の引用に見るように、「〈他者〉とは一人の主体ではない」と断言している。

そして〈他者〉とは私たちが提示したように、このようなものとしてそれを維持することが重要なのです。〈他者〉とは一人の主体ではありません。それはアリストテレスが言っているように、そこに主体の知を移すように努める一つの場³⁹なのです。

この1961年のセミナーに先行する、今まで検討した二つのセミナーにおける〈他者〉の〈他者〉を巡る主張の揺らぎは、ラカンにおける〈他者〉概念成立の過程を具現しているのである。

ヒステリー患者の欲望——症例ドラ——

さて、いままで、欲望とシニフィアンの関係を見てきたが、ラカンによれば、人の欲望の本質を最も顕著に表しているのが「ヒステリー患者」なのである。

ラカンが『無意識の形成物』のなかで、「〈他者〉の欲望」について説明するために挙げている例としてフロイトの扱ったドラというヒステリー患者の症例がある。

これはとても長く頁を費やしてあり簡単に要約することはできないが、ラカン自身がこの症例をどのようにみなしていたのかを辿り、フロイトとの違いに注目しよう⁴⁰。

ドラの父と彼の知り合いのK夫妻とは二重の不倫の関係にあり、父親はK夫人と恋愛関係にあり、夫のK氏は娘のドラに恋心を抱き、二人きりになっ

たとき愛を告白し、強引にキスをしようと迫るのだが、拒絶され平手打ちをくらってしまう。フロイトは、ドラのヒステリーの原因はこの彼女自身が無意識的にK氏への欲望を抑圧したことにあるとみなす。ドラ自身は常に変わらず、父の自分への愛を求め続けるのであるが、まるで自分が父の不倫の代償としてK氏の相手になることを黙認されているのではないかという疑惑を抱く。

この症例を複雑にしているのは、父親が性的に不能であり、不倫関係にあるとはいえ普通の性的関係をもつことは父親とK夫人の間では不可能だということである。更に問題をより複雑にしているのはドラがK夫人に対し同性愛的な感情を抱いていることである。

ラカンは、ドラの欲望の対象はK夫人であると断言している。それはK夫人は「父の抹消された欲望」の対象であるからであり、それは父は性的に不能であり父にとってK夫人は「不可能な欲望」の対象であったからである。その点において彼女もK夫人を欲望していたのだとラカンはみなす。彼によればヒステリー患者の心の均衡を保つには常に「要求」の「彼岸 au-dela」が必要であり、それが「欲望」なのである。ところが、その彼女の欲望の対象であるK夫人への欲望を満足させる位置にいるK氏は、ドラに迫るときに「妻は私にとって無である」と言ったのである。そう言ったことでドラはK氏を許せなかったのだとラカンは言う。それは彼女の「不可能な欲望」を抱くことで危うく保っていた心の均衡を破壊するものだからである。このK氏はドラにとって小文字の他者の位置に置かれ、それによってドラの欲望を支えていることが「欲望のグラフ」を使って説明されていることを後に確認したい。

そうした時には彼女に残された道は再び、ラカンの言葉を借りれば「純粹で単純な要求、彼女の父への愛の権利の要求」へと戻ることなのである。そ

してその「愛」とはラカンの定義によれば「持っていない全てのものを与えること」なのである。⁴²

ここにおいて「要求の彼岸」としての「欲望」それは不可能であるがゆえに価値のあるものであり、それを抱くことで我が身をようやく支えることができていたものが、それが不可能になったときまた再び「要求」へと戻るといふ流れが極めて図式的に示されている。そして「要求」とは「要求することが可能だ」という意味で「愛」の要求だということも明らかにされているのである。「欲望」は要求することはできない。まるで蜃気楼のようにそれを抱くことしかできないのであろうか。

ヒステリー患者の「不可能な欲望」を「〈他者〉の欲望」との関係においてより深めて考察しているのが、フロイトが扱い、ラカンが「美しい肉屋の妻 la belle bouchère」「才気のある肉屋の妻 la spirituelle bouchère」と呼んだヒステリー患者の女性の夢である。

「美しい肉屋の妻の夢」

その夢というのは次の様なものである。

ひとを夕御飯にお招きしようと思った。しかし燻製の鮭が少々あるほかに、何の貯えもなかった。買物に出かけようと思ったら、今日は日曜の、しかも午後なので、お店はどこももう締まっているということを思い出した。そこで出前で届けてくれるところを二、三軒電話で当たってみようとしたけれども、電話は故障している。それでその日ひとを御招待しようというわたしの願いは諦めてしまわねばならなかった。⁴³

この女性の症例が我々にとっても興味深いものであるのは、実はキャビア

が大好きであるのに夫に「私にキャビアをくれないように」と頼んでいたことである。しかも彼女がそう頼むその狙いが夫に熱烈に愛されたいためだと説明している点である。

ラカンはそのヒステリー患者は友人の女性と同一化しており、その女性がサーモンを食べるのを我慢しているという点から、そのサーモンへの欲望を〈他者〉の欲望であるとみなす。ラカンはそうしたヒステリー患者にとって「満たされない欲望」を自らに作り出そうとするのは、そうすることによって「現実の〈他者〉」を構成されるからだ^⑭と説明する。ラカンによれば、ヒステリー患者にとってどんな要求もその「彼岸 au-delà」には欲望があるが、それは「拒絶された欲望 *désir refusé*」なのである。この欲望のことを「線を引かれた欲望 *désir barré*」^⑮と言い換えているが、この *barré* という過去分詞を、「抹消された」と訳すのはまずいと思われる。なぜならラカンはこの *barré* を「シニフィアンによって徴づけられた」と言い換えているからである。

ラカンはこの「美しい肉屋の妻の夢」の分析の個所でこうしたヒステリー患者の分析をより一般的な主体の分析へと発展させている。それを要約すれば、次のようになる。

主体において「欲求」として現れたものは、「要求」を通るが、それは〈他者〉に話しかけることである。つまりその「欲求」をシニフィアンという形に移して〈他者〉に向けることと言える。その時、「要求」としては伝達されえないものが、残余という形で生み出される。ラカンは明言してはいないが、それこそ「欲望」なのだ^⑯と推定される。

少し唐突にも感じられるが、ラカンはここでファルスの概念を使って「〈他者〉の欲望」を説明している。

ファルスの機能を皆さんに記述する際に、私が皆さんにもたらしたことの本

質的なことは、ファルスは〈他者〉が彼自身として、現実の〈他者〉として、人間の〈他者〉として欲望するものを徴づけるこのシニフィアンであり、シニフィアンによって徴づけられるということが、その仕組み économie の中に入^④ってきます。

つまり主体は、「〈他者〉」の欲望が「線を引かれた」言い換えれば、ファルスというシニフィアンと関係づけられている限りにおいて自らの「最も本当の欲望」である「性的な欲望」と出会うとラカンは説明している。それは言い換えれば、「去勢」と出会うということなのである。本稿の終わりの方でもう一度説明するが、主体が、母親の「想像的ファルス」ではありえず、また自らも「想像的ファルス」を持っていないということを思い知らされるのが「去勢」であり、それを経ることで、主体は始めて「象徴的ファルス」を持つことができるのである。

ラカンは $S(A)$ を「シニフィアンとしてのファルスの機能であるもの」と定義し、「シニフィアンによって徴づけられた、つまり線を引かれた限りにおける〈他者〉が欲望するものを徴づける機能」として定義する。

また主体については、彼自身自ら線を引かれた、つまり「シニフィアンとの関係によって徴づけられた」ものとして捉え、そうした主体と「要求」との関係性を $S \diamond D$ と表している。

欲 動

この $S \diamond D$ については、「欲望の弁証法」という論文の中では、「シニフィアンの宝庫としての欲動」を表す表記としている。確かにこれが置かれている位置は完全なグラフでは、下のシニフィアンの連鎖に位置している「シニフィアンの宝庫」である A 、つまり〈他者〉の位置に対応している。

この「欲動」という概念については、『無意識の形成物』と題されたセミナーの終わりに近づいた1958年6月18日のセミナーの横方向と縦方向の曲線の交叉の説明で「傾向、もしよければそれが個別化された欲求を表している限りにおいて欲動と、シニフィアンの連鎖との交叉^⑭」と述べているし、また6月25日のセミナーでは、「そのようなものとしての欲動は、私たちにあって、あるシニフィアンとの関係における主体の従属に値したり、それを表す概念をまさに扱いやすい表現^⑮である」と説明している。

「欲望の弁証法」の中ではラカンは、以下の引用の下線部におけるように、「欲望は、要求が欲求から引き裂かれる余白で芽生える」と断言している。

欲望は、要求が欲求から引き裂かれる余白で芽生える。というのは、この余白というのは、要求としての呼ぶ声が〈他者〉の場においてしか無条件のものとなり得ず、欲求がそこにもたらすことができる、普遍的な満足というものは持たないこと（不安と呼ばれるもの）を可能にする欠如の形式のもとに要求が開く余白であるからである。^⑯

ここで今まで辿ってきたことを整理してみよう。まず主体に「欲求」が生まれ、それを〈他者〉に向かってシニフィアンで「要求」と言う形で表す。言い換えれば、「欲求」が〈他者〉の場を通ることにより、自己の要求と対面する。それが $S \diamond D$ なのであるが、この「完全なグラフ」と自ら呼ぶグラフ4の説明においてなぜラカンはこの $S \diamond D$ が「欲動」を表すと言うのであろうか。それはこの論文では明らかにされていない。

ラカンの理論や概念は年と共に変化していくので、ある年で言われた概念を別の年で言っていることにそのまま当てはめることには危険が伴う。しかしある時明確にできなかったものが、後に発展させられて示されることもある。例えば『セミナー第7巻』では、「もし傾向というもの la tendance が

諸々の欲求に対するシニフィアンの刻印の効果であり、欲求がシニフィアンの効果によって欲動という細断され狂ったものに変形されたものであるとしたなら⁵⁰と説明されている。つまりラカンは「欲動」を「欲求」がシニフィアンによって変形されたものとみなしているのである。これは図10のグラフで確認した点線の部分の過程の進行と一致している。

「美しい肉屋の妻の夢」再考

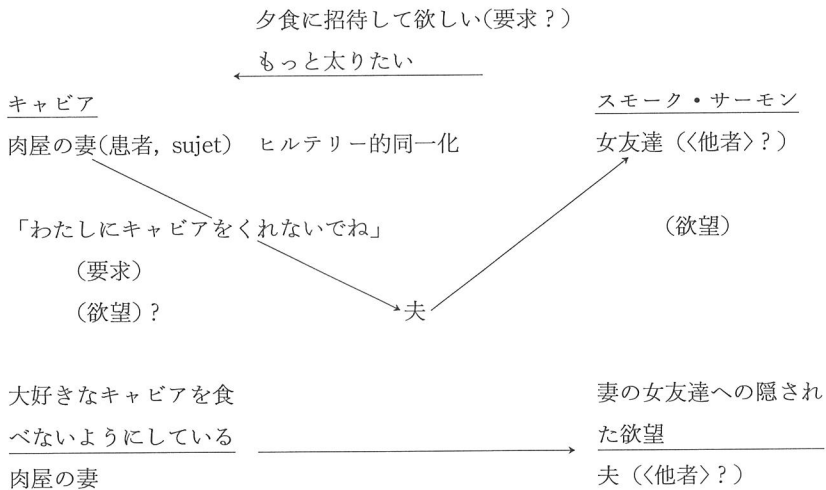
再び「肉屋の妻の夢」の分析に戻ろう。

ラカンはこのフロイトの分析した「美しい肉屋の女房」の夢の解釈を自己のシニフィアンの論理で説明したが、この患者をヒステリー患者の一般的な例として分析し、さらには人間一般の欲望の理論へと発展させた。私たちにあって検討する必要があると思われるのは、この「肉屋の女房」の夢の分析で検討された人物なり、概念なりのうちどれが、ラカンによって一般化された項目にあたるのかという点である。

この患者は彼女の友人の女性に「ヒステリー的同一化」と呼ばれる同一化を行っている。それは友人が大好きな「サーモン」を控えていたと同じようにこの患者は「キャビア」を夫に「くれないように」と頼んでいたことが示している。まず最初のレベルでは彼女の欲望は「キャビア」に向けられており、次にそれを「かなえられない欲望」としていた。夫に対してそうすることで熱烈に愛し合うことができるからとフロイトに説明している。ここでは次のように問うことができる。この患者がラカンの言うように「満たされない欲望を持ちたいという欲望」を抱いたとするなら、その場合の彼女の欲望とは何になるのだろうか。「キャビアを食べたい」ということなのだろうか、それとも「キャビアを食べさせないで欲しい」ということなのだろうか。

またそれと関係してくるが、その場合の〈他者〉の位置には誰がくるのだろうか。彼女の家に食事に招待してほしいと願っている患者の友人だろうか。それとも患者が性的な欲望を抱いている彼女の夫なのであろうか。

ラカンはこの症例のどれが、〈他者〉にあたり、どれが「要求」であるかについては明言をさけている。しかし彼女の夫もその患者の友人に対し欲望を抱いていることは指摘しており、三人の人物がめいめいの欲望を抱いていることを指摘している。ラカンが明言しているわけではないので、以下に述べることは一つの可能性として示すものであり、それを図式化すると次のようになる。



夫もそのヒステリー患者の友人の女性に対し「満たされない欲望」を抱いており、患者はその友人と同一化しており、究極的には彼女が抱く「満たされない欲望を持ちたいという欲望」つまり「キャビア」を食べたいのだけれど「食べられないことを欲望する」という状態は夫への欲望と関係していた。従

って「満たされたい欲望を持ちたいという欲望」という意味において夫がこの患者にとっての〈他者〉の位置に来ているという考え方も成り立つのである。

ラカン理論における「の de」の機能

ラカン理論において今までみてきたように、de という前置詞に意識的になっている箇所があった。その一つは「人の欲望は〈他者〉の欲望である」という時の「の de」である。ラカンはこの場合の de は「主格」を表す de だと説明している。つまり「〈他者〉」が欲望するのである。

しかし『セミナー第5巻』で、エディプス期以前の子にとっては、現実の母親が〈他者〉の場を占めるので、子は母親のファルスでありたい、つまり母親の欲望の対象でありたいと願うのである。それは言い換えれば「母親の欲望」、「〈他者〉の欲望」を求めることであり、究極的には「〈他者〉の欲望の欲望 le désir du^① désir de^② l'Autre」という表現で表せるものである。この②の de はラカン流に言えば「主格」を表す de であるが、①の du (de + le) は「目的格」を表す「の de」であると思われる。そして今問題となっている「〈他者〉の〈他者〉」であるが、これは所有を表す de であると思われる。

では、次に「美しい肉屋の妻の夢」の「満たされたい欲望を持ちたいという欲望」について検討してみよう。ラカンは『無意識の形成物』の中では、「わたしたちは実際にその夢の中にある願い、満たされたい欲望を持ちたいというそれ un souhait, celui d'avoir un désir insatisfait の満足を読み取るのです^①」と「願い un souhait」という言葉を使用している。しかし1966年に発行された『エクリ』に収められている論文では、「満たされぬ欲望を持ちたいという欲望 le désir d'avoir un désir insatisfait」と書かれている。

souhait から désir へと単語が一つ変っただけであり、しかもこの場合にお

いては殆ど似通った意味を帯びているように見えてその差は大きいと思われる。なぜならその「満たされぬ欲望を持ちたいという欲望」が満たされるとはどういうことなのかという点で、論理的に矛盾は起きないであろうかということである。ある欲望、先に挙げたヒステリー患者の例で言えば、「キャビアを食べたい」という欲望だとしよう。それを「満たされないままにしておく」ことに成功したとすれば、「満たされぬ欲望を持ちたいという欲望」は満たされてしまうことになる。では「満たされぬ欲望」を持つことに失敗した場合はどうなるであろう。同じ例で考えれば、「キャビアを食べたい」という欲望が満たされてしまう場合であろう。その場合は「キャビアを食べたい」という欲望は満たされてしまうが、「満たされぬ欲望を持ちたいという欲望」は満たされず、結果的に「満たされぬ欲望を持ちたいという欲望」は最後の次元でかなうことになる。しかし問題は残る。「欲望」が「かなう」ことや「満たされる」ということは何を意味しているのであろうか。それは「欲望」の解消ではないだろうか。「欲望」は本質的にそれを「満たすこと」を求める心の在り方なのに、同時にそれを維持することを願うという矛盾をはらんでいるのである。

いままで欲望がどのようにシニフィアンによって分節されるのかを不十分ながら見てきたが、ラカンが最も人間の欲望のあり方の本質を表していると言う「ヒステリー患者」の欲望にたどり着いた。その欲望とは「満たされない欲望を持ちたいという欲望」であった。それは3のグラフに表された〈他者〉への、そして同時に逆むきに主体に向けられた「ケ・ヴォイ（汝は何を欲するのか?）」という矢印の先にある $\beta \diamond a$ が示していた。

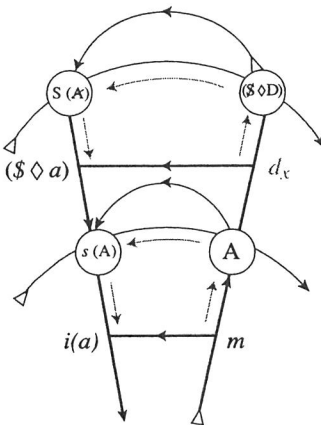
それは、何年前にあるデパートの宣伝用に作られた「ほしいものが、ほしいわ」というコピーの表すものでもある。欲望の対象が何であるかわからない。しかし私を常に欲望に駆り立て、しかも決して満足させないもの。「常

にほしいものでありつづけるものがほしいわ」というこの叫びは、まるで、「欲求」として端を発し、シニフィアンとして組み立てられ、それにより逆にずれへと生成していく「欲望」を論理的に一望できるものとして提示されたラカンの「欲望のグラフ」の説明にもなっていると思われる。

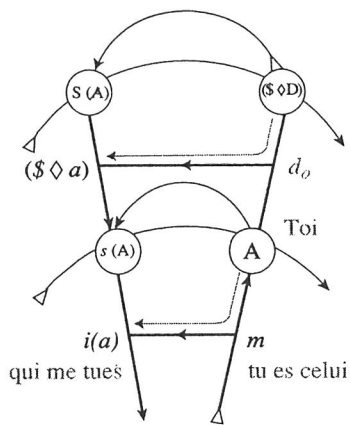
しかしラカンが『セミナー第5巻、無意識の形成物』の最後で扱っているのは、「ヒステリー患者の欲望」ではなく、「強迫神経症患者の欲望」なのである。最後にこれを検討してみたい。

ヒステリー患者と強迫神経症患者のグラフ

『無意識の形成物』と題されたセミナーの終わりに近づいた1958年6月18日のセミナーで提示されたヒステリー患者と強迫神経症患者の二つのグラフは、次のように基本的な「欲望のグラフ」に書き加えられた矢印の向きが、対照的である。



⑤4 ヒステリー患者の欲望の回路



⑤5 強迫神経症患者の欲望の回路

ラカンによればヒステリー患者は自らの欲望を支えるために小文字の他者 a を「技巧 *artifice*」として用いるのであり、それはドラの症例におけるドラがそれと同一化し、ドラに思いをよせる K 氏がその役割を果たしているのである。グラフでは、ヒステリー患者の欲望は、グラフでは「平行した二つの緊張」の下に表されている。その一つはラカンが「理想化する形成 *la formation idéalisante*」と呼ぶ $\$ \diamond a$ である。この数学素 *mathème* は後に「幻想の数学素」と呼ばれるものであり、この a は翌年のセミナーでは、「欲望の対象」を示す「小対象 a (*objet petit a*)」と呼ばれるようになるものである。

そして欲望の回路を示すために書き加えられた矢印の他の一つは、「小文字の他者への同一化」とラカンが説明する $i(a)$ に向かうものである。

一方、強迫神経症患者が、「その本質において無化された欲望」と必要な距離を保つことができるのは、「要求」との関係 $\$ \diamond D$ においてであるとラカンは説明する⁵⁶。

グラフに書き加えられた矢印の向きは「欲求」あるいは「欲動」を表す線とは逆向きに降りてきて、次に「想像界」の関係を表す矢印と重なり、最終的にはヒステリー患者と同じく $\$ \diamond a$ と $i(a)$ とに行き着いているのが分かるが、なぜこういった経路をとるのかについてはラカンは述べていない。しかしグラフにはヒントとなる書き込みがある。それが、ラカン自身によってなされたものなのか、それとも *Seuil* 版の編纂者の $J. A$ ミレールによってなされたものかは明らかでないが、 A のところに *Toi* (汝よ) と書き、 m (自我) のところに *tu es celui* (汝は…の者である)、 $i(a)$ のところに *qui me tue* (我を殺すものなり) と書き込まれている。この〈他者〉から m を通って $i(a)$ に来ている矢印は他の箇所ですべての〈他者〉が小文字の他者 a に変えられているいうことを表しているのであろうか。

いずれにせよ強迫神経症患者の欲望の特異性の説明を辿ってみよう。

強迫神経症患者の欲望

強迫神経症患者の欲望に関してのラカンの説明はヒステリー患者のそれと比較して分かりにくいように思われる。ヒステリー患者が自己の「欲望」を存続させるためにそれを不満足なままにしておくとしたなら、強迫神経症患者はどうするのであろうか、ラカンによれば、彼(女)は欲望の対象に対してではなく自己の欲望そのものに対して距離を保つことによって、自己の欲望を存続させようとする⁵⁷。しかしこれは奇妙な説明だ。自己の欲望と距離をとるとはどういうことであろうか。

ラカンは、強迫神経症患者の自己の欲望に対する関係は、フロイトが「*Entbindung*」と呼んだ、「欲動の連結分離 *la déliaison des pulsions*」「破壊による分離 *l'isolation de la destruction*」によって支配されていると説明する⁵⁸。強迫神経症患者においても欲望が形成されるときの特徴は〈他者〉との関係である。前者においては〈他者〉の欲望を通ってもすぐにそれを破壊し、「無化する」のである。ではなぜその〈他者〉の欲望を破壊しなければならないのであろうか。ラカンはそれについては説明していない。

ではその〈他者〉の欲望を無化するとはどういうことなのかラカンの説明を辿ってみよう。その前にラカンは「強迫とは何か？」という問を立て、強迫とは常に「言語化されている *verbalisé*」ものであるとまず断言する。確かに手を洗わずにはおれないとか、何かをしてしまうのではないか、という強迫にしろどんな行為にしろ強迫として人を苛むのは言語化された意識である。「強迫症患者はシニフィアンの中で生きている人間である」とラカンが言うのは、奇妙に思えるかもしれない。なぜなら象徴界に入ったすべて人間にとってシニフィアンの中で生きていることはラカンの理論では自明のことであり、強迫神経症患者に限ることではないからである。しかし敢えて「無化」

を強調するためにそう述べるのである。

ラカンはフロイトの扱った強迫神経症患者の症例である「鼠男」が4歳頃に父親に対する激しい怒りを表して「お前なんかハンカチだ。お前なんか皿だ…」等と叫びながら床を転げ回ったことを取り上げている。ラカンによればそれは〈他者〉を「対象」の地位にまで貶めてそれを破壊しようとすることを示しているのである。だからといって、〈他者〉を本当に破壊してしまったら、主体は主体でなくなってしまうため〈他者〉を維持しようとする矛盾を生きることになる。

しかし一般には〈他者〉の破壊は、まず〈他者〉の欲望の無化として行われ、そこで問題となるのは、〈他者〉の欲望を表すシニフィアンとしてのファルスである。こうした説明は抽象的であるが、これに止まらずラカンは具体例を示している。

ラカンのセミナーにおいても『エクリ』と同様に実際の症例が出てくることはまれなのであるが、「欲望」を巡る理論の説明で「強迫神経症患者」の症例を説明している箇所があるが、それは1950年の他人の論文である^⑥。以下に紹介するのは、その論文を読んだラカンが紹介している限りでの情報に基づいている^⑦。

症例と挙げられている患者は、体は健康で二人の子を持つ50歳の女性である。彼女は診療補助の仕事をしてしたが、強迫神経症患者によく見られる一連の強迫観念を持っていた。それは、梅毒にかかったという強迫観念であり、彼女はそこに自分の子どもの結婚に対する何らかの禁止であり、さらには嬰兒殺しや毒殺という強迫観念であった。

その論文の著者は、その女性に見られるそうした一連の強迫観念に先駆けて、彼女に見られる宗教的なテーマへの強迫観念も指摘している。その一つは彼女がその信徒であったカトリックの儀式に欠かせない「ホスチア（ミサで

拝領する聖体のパン」におけるキリストの肉体の存在に関するものである。彼女は「ホスチア」の代わりに「男性の性的器官」を思い浮かべるというのである。これに対し「キリストとは、み言葉 (le Verbe)、ロゴスであり、カトリックの教えの中でそのことは私たちに繰り返し教え込まれてきました。それが受肉したみ言葉であるということは、いささかの疑いもなく、それはクレド（信仰宣言）の最も要約された形式なのです」とラカンは注釈している。

さらに、その強迫神経症患者はキリストの顔を踏み潰した夢を見たと言っており、しかもそのキリストはその精神分析家の顔に似ていたと言っている。そこにラカンは、キリストと、パロールの場としての〈他者〉との同一化を見ている。そしてラカンによれば、キリストが物質化されたものとしての十字架は全体としてファルスなのである。

分析家の指摘に当惑し、自分の靴を買うことができなくなったその女性を見て、その分析家は「靴」、顔を踏み潰したことで特に靴のヒールのファルスとしての価値を認めないわけにいかなくなったとラカンは説明する。

なぜファルスが問題となるのかという点については以下のように説明されている。その女性の病気の原因は子どもの頃にあるとする論文の著者の説明によれば、子どもの頃彼女は母親が自分より妹の方を愛していると思っており、その妹が死ぬことを願っていたのである。その患者の欲望とは「母の欲望の対象」となることだったのである。その「母の欲望」のシニフィアンとしてファルスが問題となるのである。つまり彼女は母親にとってのファルスとなろうとしたのであり、そのためその妨げとなる、彼女がライバルと感じるもの、母親にとってのファルスになりうるものに対し破壊的な行動をとったのである。彼女の夫への攻撃性の表明もその現れの一つだとみなされている。

そうした強迫神経症患者に対して精神分析家のとった行為はラカンによれば、その患者自身がファルスになりたいと望んでいるからには、彼女自身もその自分が破壊したがっている当のものになることであると指摘してあげることであり、その自己破壊の望みを、彼女に〈他者〉としての分析家のファルスを破壊する対象として幻想的に与えることである。

そうした結果、その女性患者は今度は、自分の長男に精神分析を受けさせたのである。それをラカンは、精神分析家が患者に与えたファルスを患者が精神分析家に返したのだと説明する。

ラカンが繰り返し説明している強迫神経症患者は〈他者〉の欲望としてのファルスを破壊するという一例をこの症例に見ることができる。

さてここでさきほどの疑問についてもう一度考えてみよう。強迫神経症患者は〈他者〉の欲望、ひいては〈他者〉までも破壊しようとする。しかしそれはあくまでシニフィアンを用いてなされる。主体が〈他者〉に対して明言していることをフランス語の表現でそのまま表しているとしてラカンが挙げている例は Tu es celui qui me, tu es celui qui me… と繰り返して発音していると、Tu es celui qui me, tu の「,」が消え tu が音の同一性で tues（殺す）に変化し、Tu es celui qui me tues（汝は我を殺すものなり）と変化する例である。

ラカンの言う通り、これは主体が〈他者〉に対し明言している内容だとしたなら、この場合の tu というのは〈他者〉をさしていることになり、〈他者〉が主体を殺すということを表していることになるが、ラカンは、主体が〈他者〉もしくは〈他者〉の欲望を破壊すると説明していた。どういう風に説明の整合性を見出すべきだろうか。一つはそのまま〈他者〉が自分を殺そうとしていると言う強迫観念に捕らえられているのが強迫神経症患者なのだ、と理解する方法であり、他の一つは、〈他者〉の、「汝は我を殺すものなり」と

いう声、つまり自分が〈他者〉を殺そうとしているという強迫に捕らえられていると考える方法である。どちらが正しいのかは分からない。

しかしいずれにせよ、ラカンによればこうしたことは、シニフィアンを用いること、つまりシニフィアンの表現として〈他者〉を破壊していることになる。しかしそれは同時に「シニフィアンの宝庫」としての〈他者〉を支え、存続させることにもなる、といったのがラカンの説明の要点であろう。そして彼の言うように〈他者〉の欲望とはファルスというシニフィアンが表しているとするなら、そのファルスというシニフィアンを「無化する」ことが〈他者〉の欲望を破壊することなのである。

『セミナー第四巻、対象関係論』で主要なテーマとなっていたのはファルスの問題であり、「欲望のグラフ」という新しい装置を導入した『セミナー第五巻』で、最後に行き着いたのがファルスであったことから考えるとラカンが持続的な思索の歩みをしてきたことを改めて思い知らされる。ファルスについては既に他の論文で検討したが^④、ファルスとはまず、肉体的な男性の性器をさすものではない。子にとって最初は、母親にとっての欲望の対象でありたいと願うときのその母親の欲望と同義である。その場合、それを持っていると思った母親が実際には持っていないと認識した時、今度は自らが母親のファルスでありたいと願うのである。ラカンはこれを「想像的ファルス le phallus imaginaire」と名づける。しかしエディプス期においては、自分も母親同様ファルスを持ってもらいなければ、ファルスでもないということをして、「父」により思い知らされるのである。この「去勢」を経て今度は主体自らが、ファルスを持つことができるようになるのであり、これが「象徴的ファルス le phallus symbolique」である。この場合の「去勢」とはその言葉から普通想像する意味とは違い、ある種の断念を強いられるということであり、言語の世界に入っていくということである。

ラカン理論で常に問題となるのは、このファルスの概念である。人間存在のあり方を特にその欲望の側面から構造的に説明しようとする時、要となるのがそのファルスの概念であり、それはいわば、身体の一部であるという性質をとどめながら、記号として機能するのである。

結 論

いままで主に『セミナー第5巻、無意識の形成物』と『セミナー第6巻、欲望とその解釈』を中心に「欲望のグラフ」の意味を探ってきたが、これまでで一体何が分かっただろうか。「欲望のグラフ」とは何だったのだろうか。それは「欲望」という、実感としてはその存在を確実に感じられるものでありながら、目で確認できる訳ではない心のあり方を、対象化できるのかという疑問への挑戦のように思える。ラカンの提示した「欲望のグラフ」は欲望のメカニズムを目に見えるものとして提示したそれだけでも驚きであった。曲線と言葉を添えられたそれぞれの図は、ひとたび提示されるとラカン自身による説明が言説として併記されている場合でも、全く別の厚みを帯びた新たな現実、不透明で不可解な謎として感じられ、それを解くことが錯綜した思考を要求する神経症の症状にも似たものとして現れている。

欲望のメカニズムを説明するための図が、図そのもののメカニズムの解読という倒錯的なわなになっているのではないかという危惧はぬぐい消せない。それは検討してきたように、「欲望の欲望」という概念に既にほう芽が見られ、「満たされない欲望を持ちたいという欲望」にその究極の概念として現れていたが、「の de」という前置詞により自らを対象とし、メタレヴェルへと抜け出ようという理論への欲望にも似た過ちの危険性を常にはらんでいる。それは丁度、夢を見つつそれについて語ることはできない夢と同じく、対象

化したとたんに新たな謎として浮び上がる。

しかしそうした危険性を考慮に入れてもラカンの「欲望のグラフ」は画期的なものと結論できると思われる。それは、シニフィアンと「欲求」あるいは「欲動」という二つの質的に異なったものが「出会う」という形で「欲望」が生まれる様を魔法のように解き明かしたからである。二つの曲線は「同時に二度交わる」という矛盾した表現に現れていたように、実際は同時に起ることを論理的時間のもとにつながりを一つ一つ把握できるよう空間化したのが「欲望のグラフ」であった。それにより欲望が生じている瞬間の各要素を線で結ぶことにより、各要素の関係を一望のもとに把握できるのだ。

注

本稿で使用した J. ラカンのテキスト

- ・「フロイトの無意識における主体の転覆と欲望の弁証法」、『エクリ』に収録
(Subversion du sujet de dialectique du désir dans l'inconscient freudien, *in* Ecrits, Seuil, 1966) (以後 Ecrits と略す)
- ・セミナー（セミネール）。() 内は実際に行われた年数をさす。
『セミネール第5巻、無意識の形成物』
(Le séminaire Livre V, Les formations de l'inconscient, Seuil, (1957-1958) (以後 SV と略す)
『セミネール第6巻、欲望とその解釈』（「国際フロイト協会」の会員向けの出版物）
(Le désir et son interprétation, Publication hors commerce, Document interne à l'Association freudienne internationale et destiné à ses membres, (1958-1959) (以後 SVI と略す)
『セミネール第7巻、精神分析の倫理』
(Le séminaire Livre VII, L'éthique de la psychanalyse, Seuil, 1986, (1959-1960) (以後 SVII と略す)
『セミネール第8巻、転移』
(Le séminaire Livre VIII, Le transfert, Seuil, 1991, (1960-1961) (以後 VIII と略す)

(*LE TRANSFERT, DANS TOUS SES ERRATA* suivie de *Pour une transcription critique des séminaires de Jacques Lacan*, E. P. E. L, 1991) (*ERRATA* と略す)

『セミネール第9巻、同一化』（「国際フロイト協会」の会員向けの出版物）

(*L'identification*, Publication hors commerce, Document interne à l'Association freudienne internationale et destiné à ses membres, (1961-1962) (以後 SIX と略す)

- ① 本稿は1996年10月22日に大谷学会において発表された「ジャック・ラカンの欲望の理論—欲望のグラフについて—」及び、1999年5月30日に日本フランス語フランス文学会春季大会において口頭発表された「ラカン理論における欲望とシニフィアン」をもとに大幅に加筆、訂正を加えたものである。
- ② *Ecrits*, p. 814
- ③ 「他者の欲望—ジャック・ラカンの欲望の理論—」、『大谷学報』第75巻 第1号、1995年6月発行に所収
- ④ 1997年12月24日 京都大学の新宮一成先生主催の精神分析学の研究会
- ⑤ cf. *SV*, p. 311
- ⑥ *Ecrits*, p. 805
- ⑦ *Ecrits*, p. 808
- ⑧ *Ecrits*, p. 815
- ⑨ *Ecrits*, p. 817
- ⑩ *SV*, p. 14
- ⑪ *SV*, p. 16
- ⑫ *SV*, p. 95
- ⑬ *SV*, p. 90
- ⑭ *Ibid.*
- ⑮ *SV*, p. 91
- ⑯ *Ibid.*
- ⑰ *SV*, p. 92
- ⑱ *SV*, p. 148
- ⑲ *SV*, p. 218
- ⑳ *SV*, p. 198

- ⑳ Ecrits, p. 806
- ㉑ *ERRATA*, p. 104
- ㉒ SVIII, p. 283
- ㉓ SVIII, p. 167
- ㉔ SVI, p. 37
- ㉕ *Ibid.*
- ㉖ SVI, p. 310
- ㉗ SVI, pp. 37-39
- ㉘ Ecrits, p. 807
- ㉙ Ecrits, p. 813
- ㉚ Ecrits, p. 818
- ㉛ SVI, p. 326
- ㉜ SVI, p. 327
- ㉝ *Ibid.*
- ㉞ SV, p. 474
- ㉟ Ecrits, p. 819他多数の箇所と同じことが言われている
- ㊱ SV, p. 475
- ㊲ SV, p. 476
- ㊳ SIX, p. 20
- ㊴ SV, pp. 368-370
- ㊵ SV, 369
- ㊶ SV, 370
- ㊷ 高橋義孝訳『フロイト著作集2』、人文書院、125頁
- ㊸ SV, p. 365
- ㊹ *Ibid.*
- ㊺ SV, p. 366
- ㊻ SV, p. 460
- ㊼ SV, p. 479
- ㊽ Ecrits, p. 814
- ㊾ SVII, p. 348
- ㊿ SV, p. 363

- ⑤② Ecrits, p. 622
- ⑤③ 1988年糸井重里製作西武デパートの宣伝コピー
- ⑤④ SV, p. 469
- ⑤⑤ SV, p. 470
- ⑤⑥ SV, p. 468
- ⑤⑦ SV, p. 467
- ⑤⑧ SV, p. 472
- ⑤⑨ SV, p. 471
- ⑥⑩ 「強迫神経症におけるペニスへの欲求の意識化による治療の結果 (Incidences thérapeutiques de la prise de conscience de l'envie du pénis dans la névrose obsessionnelle)」掲載誌名は明らかにされていない。
- ⑥⑪ SV, pp. 448-445
- ⑥⑫ SV, p. 450
- ⑥⑬ *Ibid.*
- ⑥⑭ 「ラカン理論における「ファルス」の概念」、『哲学論集』第44号、大谷大学哲学会編、1998年発行、に所集